**木之本宿と北国街道**

徳川幕府（1603 年～1867 年）の統治下では、大名と呼ばれる地方領主は定期的な江戸への参勤が義務付けられていた。大名は、護衛、足軽、奉公人、親類縁者など、大勢の家来を引き連れて旅をすることから、旅は大名の地位を示す機会であった。大名行列は、江戸と日本各地を結ぶ主要道路（街道）を通行し、街道沿いの宿場町に頻繁に立ち寄る必要があった。

越前と江戸に通じる北国街道は、木之本宿を通っていた。この町は、旅籠、問屋、伝馬所、造り酒屋、その他の旅人向けの商売で成り立っていた。木之本地蔵院は町の中心にあり、その付近の街道沿いには小川と柳並木が続いていた。木之本駅と地蔵院の間に点在するいくつかの歴史的建造物や名所は、旧宿場町の面影を残すものとして残されている。

**一里塚**

江戸時代（1603 年～1867 年）には、旅の距離は里（約 4 キロメートル）という単位で測られていた。 里は、土塁の近くに植えられた木によって示されていた。これらの距離標識は一里塚と呼ばれ、都に通じる街道沿いにならんでいた。 木之本宿が宿場町として機能していた時代には、この場所にも一里塚があった。

**歴史的な掲示版**

かつてこの場所には、地方の統治機関が定めた法律や告知を知らせる掲示板が置かれていた。このような掲示板は、多くの旅人が行き交う宿場町では一般的であった。